

頭陀袋(65)号 平成二十九年十一月号

発行 中山かんのん

恩林寺



中山中学校下、電話三四一二四五

主人と貧乏神の話

先日、土蔵の中を掃除していたら三代前の和尚さんが読んでいた古い本が出てきました。

心を練る禅の極致、中原南天棒（明治の禅宗の有名な和尚さん）の話でこんな話がありました。少し読みづらいですが、お付き合いください。

* 禅は至極平凡であつてなにも難しいものではない。と、言うとまた、怠惰の心が生じて、一生貧乏神と仲良しになつてしまふ。それでなくとも悟りたい悟りたいと悟りにばかり引っかかる。悟ることもなかなかできない。

できないのみならず、少し悟り掛かつて

いる悟りもどこかに離れて行つてしまう。

第一、悟ろうなどと思うのがまちがつている。公案（修行の宿題）にかじりついてがりがりの貧乏神を、知らずしらずの間に迎えておる。貧乏神が居る家は長者には決してなれないよう、公案にのみ執着していると一生、大事を得る事が出来なくなるのじや。しかし貧乏神はシツコイからなかなかゆかぬ

*「主人公曰く「十月は神なし月と思いましに貧乏神はいつも離れぬ」

* 貧乏神曰く「朝寝坊と稼業嫌いの奢り好き、心安さに定宿とする。」
* 主人公曰く「この月は他所にもゆきやれ、貧乏神とは一生沿うとは約束はせぬ。」

三世も

こんなのがある。よく味おうて今のうちにきつぱりと貧乏神と離縁せぬといかん。離縁したなら再びそんなものに見込まれないようにしたほうが良い。

これは各々の心身に貧乏神のうかがう隙があるからぢや。 禅を学び修業するものは心身に隙のないようにせねば効果がない。

＊

禅宗の坊さんでなくともなんだか思いい当たるものがありますね。

おしらせ

十一月十一日

午前十時半より十一時

黄檗宗管長近藤博道猊下御親修、

観音慶賛法要

午前十一時より

特別講演

黄檗の文化と私たちの生活

黄檗宗布教師会会长

芹沢保道老師

引き続き斎座（昼食）

*ご参拝くださる方はお寺まで電話で申し込みいただきたくお願ひいたします。